

研究の窓

文明と文化

「日本は西洋化した。しかし、近代化していない」と、1924年に来日したノーベル賞詩人 R. タゴールは日本を鋭く批判した。

昨年、インドの僻村で結婚式に招かれ、大地にどっしりと坐っている4000名の人々とともに食事の接待を受けた。4000名とは、老いも若きも村民のすべてで、その光景は壮観というか感動的でさえある。村を挙げて一組の夫婦誕生の喜びを分かちあうコミュニティが存在していることを実感させられた。

アジア社会の自然発生的共同体を、わが国は、特に戦後、封建的で閉鎖的であるとその前近代性のゆえに否定し、近代社会の建設を目指し、そして、産業社会化に成功した。

果たして、日本は近代化したのであろうか。

アジア社会で、地域生活のみならず、経済さえ宗教的に秩序づけられ、経済発展が阻害される一因となっているのは疑いを入れない。

なるほど、日本の文明は繁栄し、社会は豊かになった。しかし、経済活動を包みこむエトスに欠け、障害者は偏見に、老人は老いの不安に悩まされ、児童は登校拒否といった文明症候群に苦しむ。伝統的共同体は崩壊しているのに、それに代わるコミュニティは形成されていない——。ボーヴォワールの言葉でいえば「文明の挫折」といわざるをえない。

タゴールの批判は、67年後の今日なお真理なのではないか。

「人間は孤独に耐えられても、社会的孤立には耐えられない」という。人間を社会的孤立から守る働きが社会福祉であるならば、社会システムは日ましに充実されている。けれど、その前提となる「孤独」に耐える内的社会的条件が成熟しているとはいえない。

私の町のひとりの老人は、「地獄にひきこまれる淋しさ」と表現したが、相互依存的生活を支えた血縁・地縁社会が消えたのに、自立する主体的契機が見出せないのである。

自立と連帯の豊かな均衡のとれた展開こそ福祉社会の目標であり、それは、すぐれて文化の問題であるに違いない。

その意味で、社会福祉は、豊かさに奢っている文明社会に対するチャレンジであり、新しい人間像、社会観を切り拓く文化創造の営みであり、真の近代化への役割を負う一面をもつことを忘れてはならないと思う。

A. シュワイツェルの警告を想起する。

「われわれは文化没落の徴候のなかに立つ。戦争がそれをもたらしたのではなく、大戦はこの徴候の一つにすぎない」

阿部 志郎

(あべ・しろう 横須賀基督教館館長)